

と三人深更の停車場へ急いだ。樹人君の暖く着込んだ外套の内
衣竄深く、今日の席上吟は収められて、一日後の東京なる流觴
居へ運ばれるのである。後に知ったのであるが、此の日東京の
曲水例会の席題も、「松納め、水仙」であつたさうだ。期せず
してこの暗合を見たのは一奇といふべきであつた。(曲水2-9)

一月八日 青木幸太郎宛 静岡市鷹匠町三 海野長頸子

六日夕刻より来岡中の樹人君と七日朝来岡の苔雨君を停車場
に迎へその足にて三人にて烈風の中の賤機山へ登り静岡の螢を
瞰下しつつ真向の富士に対して東京なる君を偲び候 それより
帰宅俳席をしき候ところへ貴兄よりのおはがきつづきて先生及
び花醉氏の祝電到着なか／＼の景氣にて候 当地句会は思ひの
外来会者尠く候ひしがしみじみと句作出来句稿は同夜帰京の樹
人君携帯いたし候へば今頃は水巴先生の御手許へ差上げし事と
存じ候 花山亭の方のはいかゞに候ひしや定めし御骨折りの事
と察しをり候 苔雨君も小生も十二日夜の小生許の寒燈会初会
迄には上京すべく候 また／＼東京にて御目にかゝるが楽しみ
に御座候 御健吟の程祈りあげ候 頓首

寒 燈 吟 (水巴選)

(曲水2-10)

氷遠く翔る鳥ある棚田かな
池の氷鳴き居る松の鶏かな

(1月19日)

流觴居小集 席題「風邪」

梅の幹に日は陰りゆく風邪ご、ち

(1月20日)

流觴居小集 席題「冬空」

冬空や大瀧涸れし奥の院

(1月23日)

一月十一日 青木幸太郎宛 静岡にて 長

前略 或は樹人氏より明土曜日の寒燈会は小生宅にて相催す
様御通知いたし候かとも存じ候へど少々都合悪しくまだ明日中
には小生上京いたしかね候へば勢同会は次回に順延いたしたく
候 何卒左様御含み願度候

一月十七日 青木幸太郎宛 海野長頸子

御無沙汰いたし候 このお寒さに御機嫌いかがに候や 小生
ようやく二三日前に上京仕り候 過日の夜は小生の御通知申上
るが遅れたためわざ／＼の御足労を煩し恐縮の至りに候 こん
どこそいつはりなく明後土曜日夜は寒燈会新年第一回を小生宅
にて相催すべく、何卒御早ばやの御光来待上候 先生にはすでに
両三度御目にかかり申候 苔雨兄も一昨日帰京なされ候 先は
御しらせ迄

一月二十六日夜 青木幸太郎宛 寒燈会二人

君の好きな「火事」を出題してお待ちしました処とう／＼御
出がなかったのは残念でした、この寒さに風邪でも召したんぢ
やありませんか 明後月曜の晩は例の樹人氏の宿直室句会だ
そうです、寒燈会第六回のつもりなんだそうですからどうぞ御
出かけ下さい

寺に火の移りしさまや銀杏高し 樹人

鯨見の人に交りて沙門かな 長

父ひとりこと／＼煮るや鯨なべ 苔雨